

統合失調症治療における「法」と「手法」

医療法人聖和錦秀会 阪本病院 なかまの家
渡邊 潔

1.緒言

現代の社会はかつてのような安定した父権的な秩序に基づくものではなく、さまざまに多様化してきている。そのため1つの社会のなかで自分らしさを見出していくという神経症的な治療過程は、社会そのものが単一のものでなくなりつつある現代においては減少していくことになるだろう。実際に統合失調症の軽症化、自閉症スペクトラム障害や解離の増加など精神科医療の現場で出会う対象も神経症以外のものが増えている。

「法」というテーマで見た場合、現代は法が揺らいだことにより自由度が増す半面、人は何を欲望したらよいか迷うようになり、その一方では厳格化した超自我によって互いに罰しあう現状が生まれつつある。これは社会が神経症的なものから倒錯的なものや統合失調症的なものへと変わりつつあるといえるが、ここでは「法」は、主体を殲滅しあるいは耐え難いほどの強い快楽を得ることを強いるなど、主体にとって極めて危険なものとして現れる。そのため、襲いくる「法」をそれぞれが独自の方法で飼い馴らすことが重要となってくる。

これは統合失調症の治療テーマとそのまま重なるが、本研究においては「手法」という観点から新たな視野を開くことを目的とする。これはドゥルーズがウルフソンやルイス・キャロル、バートルビーなどに触れつつ考察した概念であり、「法」よりも個別的で操作的でありながらその都度「法」の代替物として機能するようなものである。統合失調症者における自閉的で反復的な様々な振る舞いを、「手法」として捉えその機能を取り出すことで、統合失調症だけでなく現代の様々な精神疾患の治療においても有用な知見が得られると思われる。

2.方法

院内で行っている表現療法的プログラムである「アートクラブ」を患者さんとともに運営し、そこから症例を引きつつ、統合失調症者の振る舞いを手法として考察する。

3.結果

まずアートクラブについて簡単に説明すると、毎週行われている全病棟自由参加の表現療法的プログラムである。描画ができる用具が用意され、参加者自身がコーヒーを作り、リクエストした曲を BGM として流している。1 時間ほど作業をし、ホワイトボードに作品を貼ってみなで鑑賞して終わるという流れになっている。作品を仕上げることだけではなく、言葉や物などの交流や交換を最大限にするよう重視しており、さまざまな言葉のやりとりが生まれている。その場の使い方は人それぞれであり、ただ来て話すだけの人やコーヒーを飲んで一言お礼を言って帰るだけの人もある。スタッフは心理士が 2 名と心理学の実習生 1 人の計 3 名であり、参加者は数名から 10 名程度である。

・A 氏 40 代女性 統合失調症

A 氏はアートクラブにユニークな形で継続参加している方である。以下彼女の振る舞いを分類しつつ記述することにする。

・作品

A 氏は描画は一切せず、厚さ 5 センチほどにもなるノートや大量の紙片を持ってきて、そこに単語をいくつも書いて空間を埋めていく。内容は「アートクラブ」「ホテル」「アイドル」など多岐にわたり、同一単語が紙面の一角に 10 個程度群れを成して書かれており、別の区画にはまた違う単語が同様に繰り返されて書かれている。いくつかの語は丸で囲まれており、表も裏も紙面をびっしりと埋め尽くすと次の紙に移るようである。文章は一つも書かれておらず、意味を読み取れそうで読み取れない印象があり、時折り既存の文字と微妙に異なる新文字で書かれている。

・際限のない欲求

A 氏はお小遣いがないためか「私にはジュースしかないんです。だからジュースくださいね。」とコーヒーを際限なく飲もうとするので他参加者から齟齬をかってしまう。制止はきくが、放っておくと本当に何倍でも飲みそうであり、身体の限界を感じさせず、満腹や満足といったものも感じられないようである。

・語り

A 氏のコミュニケーションは基本的にスタッフに対してであり、同じことを何度も繰り返し語っている。そして自分自身のことではなく、こちらのこととして語ることが特徴といえるだろう。例えば「渡邊チーフはなんて美しいんでしょう。容姿端麗でお父様お母様の寵愛の賜物ですね。いくらでもお嫁の貰い手(マ)があります。もっと自信を持ってくださいね。」といった極端な賛辞や、「渡邊チーフの夢はなんですか？ さあ夢を書いてください」といったものが挙げられる。ここで〈A さんも綺麗ですよ、自信持ってくださいね。〉〈A さんの夢は何ですか？〉などと返しても「私はぶさいくでお嫁の貰い手ないんです。自信もたなくていいんです」「私は夢ないんです」と取り付く島もない。そこで A 氏の話

法にしたがって、賛辞に対して感謝したり、こちらの夢を書くようにしていった。このやりとりをひらすら繰り返し、半年ほどすると少しずつ変化が現れ、「私の夢は大切な人の幸福です」などと少しずつ語れるようになっていった。

・贈与

A氏は別曜日に行っている院内喫茶店で、筆者に水を何杯も何杯も持ってきて、それをすべて飲むことを求める。そこではこちらの胃袋の許容量といったものはまるで意識されていないようであった。またA氏はよく架空の贈り物をする。最初のころは両手を組んで目を閉じて祈り、「渡邊チーフ、天国からギフトがあります。帰りに売店に寄ってくださいね」という具体性のないものであった。そういうやり取りを繰り返していくと、やがて「渡邊チーフお腹空きましたか？なにが食べたいですか？」というものになり〈〇〇が食べたいかな〉という「〇〇いれとききました」というものへ変わっていった。その宛先は定かではないが、まるでこちらの胃袋に直接入れたかのような印象であった。そうしてこの不思議なやり取りは何度も繰り返された。ここでも同様に、〈Aさんは何が食べたいの？〉と尋ねても「私はなんにも食べたくないです」という返答があるだけであった。しかし少しずつ変化が見られ、最近では〈Aさんのおすすめは？〉と聞くと「ゼリーとかどうですか？」などと返答が出るようになり、また「渡邊チーフ、エステを用意しましたから行ってくださいね」など、食べ物以外の美に関する贈与が出始めた。

4.考察

以上の結果からA氏がとっている手法について考察することにする。まず自分ではなく目の前の他者に欲望させることで、自らが欲望する主体にならないようにしていることが見て取れる。この回避の手法は徹底したものであるが、一体何のためなのだろうか。

ここでドゥルーズが『批評と臨床』でメルヴィルの小説『バートルビー』を引き合いに出し「手法」について語った¹⁾ことを参照しよう。筆生である主人公バートルビーはなんらかの意志を問われるような状況で「したい」とも「したくない」とも言わず、「しないほうがいい」と意志の主体になることを徹底して回避し、上司を、そして常識を動揺させる（社会は意志のある主体を想定して構築されているためだ）。そしてこの回避の手法によってバートルビーは「生き残る権利を得た」のだとドゥルーズは言う。ここには欲望の主体になることは自明のことではなく、ある種の場合には耐えられないことであることが示唆されている。統合失調症の発症が、結婚や親になること、あるいは就職や昇進などをきっかけにして起こりやすいものであることはよく知られている。欲望を自らのものとして持てないとき、それは「したい」から「すべき」という超自我的要請へと容易に変化する。とりわけ統合失調症においては象徴的な水準で去勢（制限）が機能していないので、結婚への欲望が「結婚しなければ女ではない」というものになったりする恐れがある。とすると、A氏は自らの代わりに欲望してくれる他者を立てることで危険な欲望から距離を取っ

ているのだと考えられるだろう。

この手法に続いて A 氏は、その他者の身体性を高めるような関わりを取り始めた。結果の「贈与」にあるように、まずは水を他者の身体に詰め込む段階があり、やがて他者に何を食べたいと欲望しているか聞いた後に「いれときました」とそれを満たすようになった。そして最近ではエステを用意することで身体の外観を整えようとする動きも出始めた。これらは主に想像の領域上のことではあるが、これは A 氏にとって欲望する他者に対して、その中身を詰め込んだり外身を磨いたりして、身体を付与しようとする試みだと考えられるだろう。それではなぜ身体が必要となるのだろうか。

ドゥルーズは法や原理を増殖させる動きであるバロックを論じた『褻』において、「私は身体を持たなければならない」とし、それは「みずからの力の制限のため」であるとする²⁾。身体は有限の胃袋を持ち、ほどほどの具体的な美醜を持つ。ここでは身体を持つことで欲望には自然と制限がなされ、つまり去勢がなされ、欲望が安全なものになったのではないだろうか。以上 A 氏が用いている手法をまとめると、「他者を立てて代理として欲望させることで距離を取り、それに身体を付与することで欲望に制限をかける」というものになるだろう。そしてこの流れのなかで、A 氏は「私の夢は大切な人の幸福です」や「ゼリーがおすすめです」など、欲望する「私」という主体性が少しずつ現れはじめた。今後この主体性がどのような変化を辿るのか、またそのとき今の手法は残されるのか手放されるのか、あるいは発展するのか。それらの問題は今後の課題としたい。

5. 結語

本論では一人の統合失調症者の一年の振る舞いを辿ることで、そこに潜む独自の「手法」がもつ治療的な機能について考察した。振り返ってみると、人の治癒への道筋はそれぞれ独自のものがあり、一見遠回りに見えるようであっても、本人自身が歩んだその過程こそがその後の安定を支えるのだと思わせられる。こうして治癒イメージを豊かにすることは、治療のあり方にも柔軟性や多様性をもたらす一助となるだろう。

6. 文献

- 1) G. ドゥルーズ. 『批評と臨床』. 守中他訳. 東京 ; 河出文庫. 2010; p.152
- 2) G. ドゥルーズ. 『褻』. 宇野訳. 東京 ; 河出書房新社. 1998; p147・195